

ま と め に か え て

本研究の主題が決定した頃、中学部3年生だったK君たちが、早いものでもうしばらくすると高等部卒業という時節を迎えた。このように、昭和61年度より内容を大きく4つに分け、4年間にわたって進めてきた研究であったが、その経過をここで簡単に振り返ってみたい。

本研究の中では、結果的に「子どものかかわり合いをどう理解するか」という点に大きく力を注ぐことになった。わたしたちが、日々生きていること自体が、かかわり合いそのものであるといっても過言ではなく、かかわり合いのみかたも子どもの生きざまといったものを振り返りながら、より多面的でかつ鮮明に映し出すことができるよう努めてきたつもりである。そのような中で、三指標・三基盤というひとつの視点が生まれ、ある程度かかわり合いの姿がみえてきたわけであるが、それは最終的に「理解できた」という満足感に侵れるものではなかったように思われる。手続きがやや複雑過ぎはしないか、だれが観察しても同じ結果が出るような客観性に欠けはしないか、指標と基盤の関係がいまいではないか、指導法にどこをどう生かしていけばいいのかなどは実際使っていく上でよく問題として上げられたことである。そのような過程を経ながら、やはり教師にとって「理解」というものは完結することのない更新の連続でなければならないし、終わりのない過程であることを改めて思い知らされた次第である。今後は、さらに子どもたちとの実際のかかわり合いの中で理解の方法も改善していかなければならないと考えている。これは、換言すればかかわり合いという対象そのものがいかに子どもたちの成長・発達に深く、しかも複雑に関与しているかということであり、画一的で柔軟性のないアプローチでは理解しえないものであることを物語っているといえよう。

しかし、三指標・三基盤を共通のものとし、学校全体の子どもを全教師が同じ視点でみれるようになったことは小、中、高一貫した教育をめざしているわたしたちにとって、今後必ず効果的に作用してくれるはずである。理解によって手だてを求め、その結果を評価し、そのことによって理解を深め、さらに手立てを工夫する。この積み重ねこそが教育のいとなみそのものであるとするならば「共通した目」を持つ入口に立てたことの意味は重い。

さて、いわゆる指導法研究であるが、各学部での焦点化された指導の結果は前述のとおりである。一面的な割り切った原理や、すっきりした明確な技術に依存したい欲求は、わたしたちも当然持ち合わせているわけであるが、理解することの困難さをいやがうえでも味わい、そのようにとうてい割り切れるものではないことを十分承知した経過もあり、指導法研究の実際は道なき道を歩むといった、うよ曲折の連続であったように思われる。そのような中でも、各学部の実践を通しながらわたしたちなりに得たものについて少しコメントしておきたい。

小学部では教師と子どもの相互了解に視点をあて、その度合いを高めるために実践を重ねた。その中で、様々な手だてを用意することも当然ながら、教師と子どもの作り出す世界の中で、自分があたたく見守られている（一緒に生きていこうとする）感じを受け止められるような他者に教師がなりえた時、子どもは自分らしさを取り戻そうとする活力を示しはじめることが徐々にわかってきた。そのことが相互了解の度合いを高め、豊かなかかわり合いを保障することにつながる成果を得、他学部の実践にも最も基本的な問題として大きな示唆を与えることになったと思われる。

中学部では、子どもの学習活動を援助し、豊かなかかわり合いを促進するために、教材・教具と

いう概念の枠を越え、広く子どもにとっての「物」とは何かを「テーマ」の共有に視点をあてながら追求していった。その中で対「物」との関係と、対「人」との関係の中で両者が図地分節しながら友達や教師とテーマを共有し発展させていく展開を追求し、共有の度合いを高めていくことができたわけである。子どもは教師や友達との関係の地の上で「物」とかかわり合い、同時に「物」との関係の地の上で教師や友達とかかわり合いを豊かにしていくことを再認識させられたが、対「物」と対「人」の関係を相互関連させながら実践を重ねたことに意義があったと思われ、今後も他学部と連携をとりながらすすめていければと考える。

高等部では集団の中でいかに豊かにかかわり合うことができるかを主題に適当な集団を構成したり、様々な活動内容を用意してきた。小学部、中学部の集大成ともいえる高等部では卒業の姿を見据えながら、少しでもスムーズに社会生活に参加できるようにと実践を重ねてきたのはいうまでもないが、最大の問題は「いま」置かれている集団の中でいかに豊かにかかわり合えるかであり、「いま」を充実させていくことが卒業後の、予想を越えた豊かなかかわり合いをみだしていくのではないかと考え取り組んできた。その結果、子どもに適した集団や活動内容を用意することで、より豊かなかかわり合いをみることができ、今後は小学部、中学部の研究を生かし、総合的に手だてを考えていく必要がありそうである。

以上、各学部とも様々な指導法研究に関する課題の中から、限られた一面のアプローチではあったが、それぞれささやかながら一応の成果を得ることができた。学部では、視点の違いこそあれ、一人ひとりに三基盤等の実態から適切な課題が導き出され、その時々の状態像を三指標で追いながらさらに豊かなかかわり合いをめざす実践が展開できたと考える。しかし、縦断的な事例研究を中心にすすめてきており、般化するだけの資料にはまだ不十分な状況である。一人ひとりへのアプローチの仕方が違ってくるのは当然で、どの子どもにも、どの場合にも通じる一般的な手だてはないと思われるが、この成果を今後、他の子どもにも生かしていけるような取り組みに発展させたい。また、2年次までには子どものみかたを確立させるために縦割り研究（子どもと教師の学部の枠を解いた）、3・4年次では各学部のニーズを優先する意味で横割り研究（各学部）となり、体制として適当であったか疑問を残した形となった。それぞれの長所等を見極めた研究体制作りも今後の課題となりそうである。さらに、評価の段階において、各学部とも「教師の望ましさ」の評価に合わせしまい、やや強引に枠に押し込めてしまった面があったかもしれない。わたしたち教師自身の「かかわり合い」の豊かさはどうであったのか、という評価も含めてさらに子どもをみる目を養う必要性を感じている。

いずれにしても、わたしたちの研究はこれからが真の意味で取り組みの意義が問われることになるわけであり、これまでの研究をもとにしながら、検討を加え、研究を日常化するとともに、子どもの成長、発達の場合としての「かかわり合い」をさらに豊かにするために実践を続けていきたいと考える。